

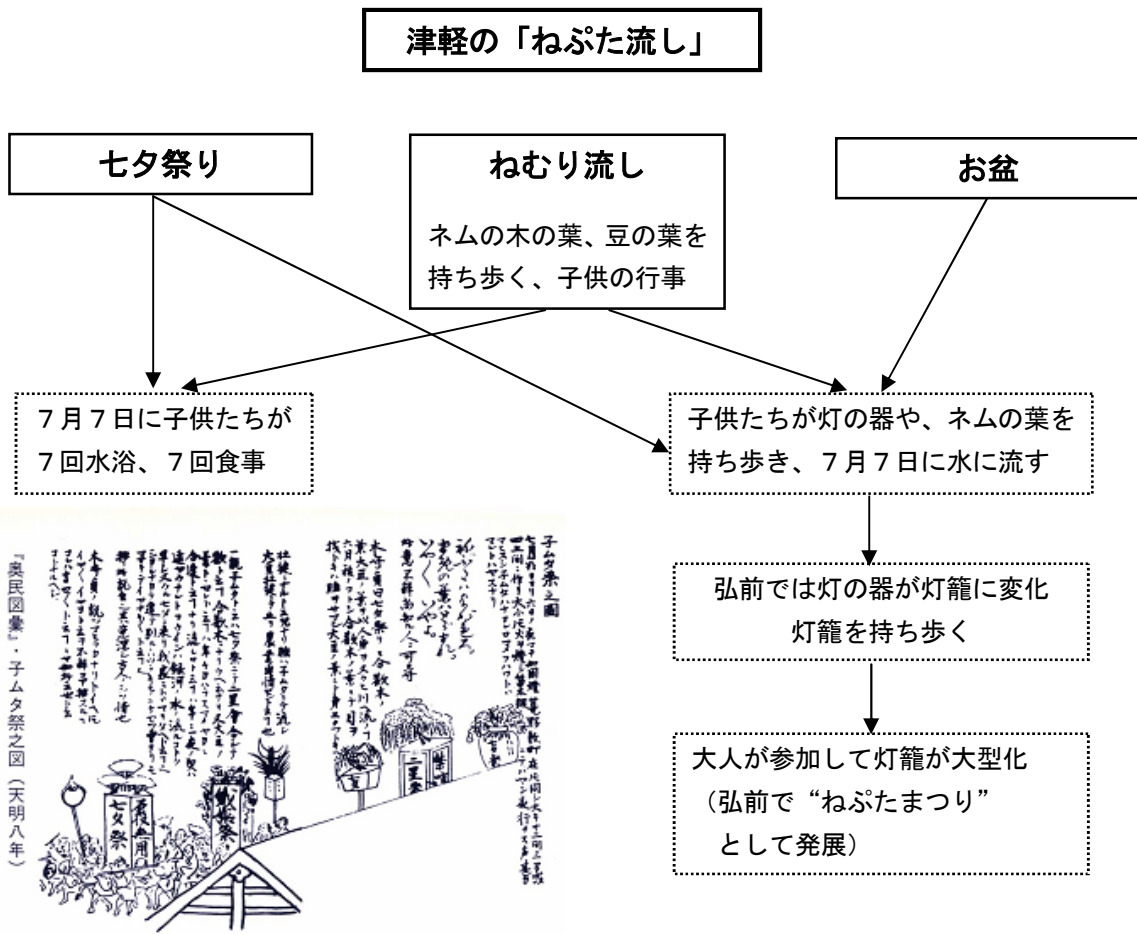
「ねふた流し」は、「眠り流し」と「七夕」と「お盆」が習合した行事

「眠り流し」は、子供の健やかな成長と無病息災（健康）を願うために行われた子供の行事。

津軽では「ねふたながし」と呼ばれ、これから「ねふた」（名詞）が生まれた。

「ねふた」は灯の器のことで、のちに灯籠（ねふた灯籠）のことを意味した。

これを持ち歩く行事が「ねふたながし」で、祭りに発展して「ねふたまつり」になった。



平良野貞彦の『奥民図彙』（天明8年/1788年）

「眠り流し」：眠ることは良くないことで、「眠り」は一種の罪悪と見なしていた。* 禊と祓いの思想

眠り（睡魔ともいうべき何か悪いもの）を身体から追い払って水に流してしまうこと。

眠り流しは子供たちが行っていた。⇒ 子供の無病息災と健やかな成長を祈願する風習

子供たちは合歓の木の葉や豆の葉を持ち歩き、それらの葉を身体にこすって「ネムの葉流れろ、豆の葉留まれ」と唱えて川に流した。（ネムの木の葉には睡魔を含めた何か悪いものが宿っていると考えられていたので流れてしまえばよく、「まめまめしい」を意味する豆の葉は留まって欲しいとの願いが込められていた。）

「眠り流し」は旧暦の7月4日頃から6日にかけて行われた。 *夜なので灯火が必要

坂上田村麻呂説：平安時代初期、征夷大將軍・坂上田村麻呂が蝦夷征伐の折、敵（蝦夷）を誘い出すために大きな人形（燈籠）を作ったというもの。

旧津軽藩士・内藤官八郎の『弘藩明治一統誌』（明治時代に刊行）で紹介。

この説の元になったと思われる『東日流由来記』の信憑性がないこと、坂上田村麻呂が津軽に来たという史実もないことから、この説は全くの虚構（フィクション）である。

ためのぶ

津軽為信説：1593(文禄2)年、藩祖・津軽為信が、京都の盂蘭盆会の趣向として大燈籠を作らせたというもの。

郷土史研究家・松野武雄が1931(昭和6)年に提唱。

この説の元になったと思われる『津軽偏覧日記』の信憑性がないこと

↳ ① 京都を中心とする近畿地方の史料に「大燈籠」の記録が存在しない。

② 為信に大燈籠の製作を進言したとされる服部長門守は、この時まで家臣ではなかった。

③ 享保年代に入って、燈籠の製作中止を具申したとされる勘定奉行・三上仁左衛門が家臣として存在しない。

1593(文禄2)年から1722(享保7)年の『御国日記』に“祢ふた”（ねふた）の最初の記録が登場するまで、130年間もの間が空白になっていることなどから、

この説も藩祖・為信を讃える虚構（フィクション）である。

アイヌ（語）起源説や「青森ねぶたは“凱旋ねぶた”で、弘前ねぶたは“出陣ねぶた”という節も、全くの虚構（フィクション）である。これらの説では同じ行事である全国の「眠り流し（ねむりながし）」の起源を説明出来ない。

ねぶたの記録：▽『御国日記』1720(享保5)年7月6日

「今晚、第5代藩主・信寿公が、新寺町の報恩寺で“眠流”を御覧になる。」

* “眠流”は“ねぶたながし”と発音し、夜に子供たちが灯籠を持って歩いた可能性が高いと推察される。

▽『御国日記』1722(享保7)年7月6日

「6日、5代藩主・信寿公は午前11時に紺屋町の織座へおいで遊ばれました。

お供の者はいつもの通りです。織座では“祢ふた”を御覧になりました。

“祢むた”が殿様の前に出る順番は左の通りです。

1番 本町・親方町・鍛冶町	2番 茂森町	3番 土手町
4番 東長町・本寺町	5番 和徳町	6番 紺屋町
7番 亀甲町・田茂木町	8番 荒町	

右の通りであります。“祢むた流”は紺屋町から春日町へ通って行きました。

尾形様（殿様のこと）は午後8時にお城にお帰りになりました。」

* “祢むた流”は“祢むた”を持った子供たちの行列のことで、信寿公が9時間も織座で見物していたことから、灯籠も見事で各町会の隊列も相当長かったのではないかと推察される。しかも、藩当局によって計画され、当局の統制の下に行われたのではないかと推察される。子供たちの「年中行事」から「まつり」へ変化発展したことが推察される。つまり現在行われている“弘前ねぶたまつり”の原型となったのではないかと推察される。

* 信寿公が隔年で“ねぶた”を見物しているのは、参勤交代の絡みで、弘前にいた時に“祢ふた流”が整然と行われていたと推察される。

◆「ねぶた」の起源のまとめ

1. 享保年間（1716年～）の初め、弘前では“ねぶた流し”の灯火（灯の器）が灯籠に変化。織座の人〔第4代藩主・信政の時代に野元道玄をはじめ、京都から弘前にやってきた人びと〕が、大きく関係している。この灯籠を“ねぶた”と呼んだ。初期の灯籠が、長い棒の先に灯籠が付き、その上に飾り物がついていることから、今日の子供の手持ち“ねぶた”に大きく影響していることが推察される。
2. 大変見事なものであったので、第5代藩主・信寿公が御在国〔参勤交代が無く、弘前にいること〕のときには必ずといっていいほど報恩寺や織座でご覧になった。
3. 織座でご覧になったのは、織座が“ねぶた”発祥の場所であったからではないかと考えられる。
4. “ねぶたながし”から“ねぶた”という言葉（名詞）ができた。

◆「ねぶた」の呼称のまとめ

1. 津軽の方言に大きな変化はない。
2. 津軽では最初から「ねぶた流し」、「ねぶた」と発音
3. 「ぶ」の表記法（書き言葉）を知らなかった。
4. 「ぶ」の代わりに「ふ」、「ぶ」、「む」が用いられた。江戸時代に「ねぶた」と発音する言葉はなかった。
5. 明治時代に「ねぶた」の当て字「倭武多」「倭武太」の「武（む）」を「ぶ」と読んだために「ねぶた」が普及した。

「ねぶたまつり」は、元々、子供のまつりだったので、

「ねぶた」に“倭侮多”、“倭武多”、“倭武太”のように、悪いことを意味する「倭（^{ねい}倭）」の字を用いるのは やめてほしい。

^{ねい}倭（^{ねい}倭）＝口先がうまく、人にへつらうこと。心がねじれていること。

*しかも倭は、倭の俗字

蛇足：松木先生が暗に言いたかったのは、

青森の「青森ねぶた祭り」は、「青森ねぶた祭り」に

五所川原の「立倭武多祭り」は、「立ねぶた祭り」に 直した方がいいよ
だったと思います。

* 文責：弘前ねぶた参加団体協議会事務局長 波多野 厚緑